**「シャンカラーチャーリヤの賛歌**

**～神様に集中する事」第1部**

2018年11月18日

逗子例会

スワーミー・メーダサーナンダによる講話

於・逗子協会

賛歌「バジャ・ゴーヴィンダム（Bhaja Govindam）」の話をする前に、作者のアーディ・シャンカラーチャーリヤ（Adi Shankaracharya）について少しお話ししたいと思います。インド哲学には、非常に有名な哲学者としてシャンカラーチャーリヤ、ラーマーヌジャーチャーリヤ（Ramanujacharya）、マドゥヴァーチャーリヤ（Madhvacharya）の3人がいます。実は、「アーチャーリヤ」とは「先生」に対して使う呼び名なので、そこから「シャンカラ」が「シャンカラーチャーリヤ」となるのですが、この3人のアーチャーリヤは特別な意味の「先生」です。

**アーチャーリヤ**

シャンカラーチャーリヤ、ラーマーヌジャーチャーリヤ、マドゥヴァーチャーリヤは、それぞれ「非二元論」、「限定非二元論（または限定一元論）」、「二元論」という哲学の学派の提唱者です。ごく単純な説明をすると、これらの学派の違いは「ジーヴァ」（jiva。肉体を持つ魂・真我）と「ブラフマン」（Brahman。絶対者、究極の実在）との関係の捉え方です。マドゥヴァーチャーリヤの説いた二元論では、ジーヴァとブラフマンは完全に別のもので、植物で言えば竹とバンニャンほど違いがあります。ラーマーヌジャーチャーリヤの限定非二元論では、ジーヴァはブラフマンの一部であるとされます。波が海の一部であることや枝が木の一部であるようなものです。そしてシャンカラーチャーリヤの非二元論では、ジーヴァもブラフマンも同一です。木である、という点でリンゴの木もマンゴーの木もバンニャンの木もみな同じ、という考え方です。言い換えると、ジーヴァの本性は、ブラフマンと同じく意識である、ということです。

この3人の哲学者の中でも、非二元論を説いたシャンカラーチャーリヤは最も有名です。8世紀に生まれた人物ですが今でも多くの人々にその名を知られており、インド哲学の学者・研究者の中には程度の差こそあれシャンカラの作品を研究する人が数多くいます。シャンカラの生涯について記した伝記は20～30冊あり、どれが最も信頼できるか調べるのは簡単ではありません。どの本にも彼の生涯に起きた奇跡がたくさん書かれており、事実と想像の部分を区別するのが難しくなっています。一部の学者がこれらの伝記を全て研究し、基本的な事柄のいくつかを明らかにしています。シャンカラは西暦788年、南インドの小さな村カーラディ（Kaladi、現在のケララ州コーチ）でシヴァ神の熱心な信者である両親の元に生まれました。

**際立つ才能**

これから、シャンカラの生涯に起きた出来事をいくつかお話しします。信じがたく思われるものもあるでしょうが、歴史上の人物の中には生まれた時から類いまれな才能を持っている人がいるのを忘れないでください。シャンカラもまさにそのような人物で、たった2歳で文字をマスターし聖典に興味を示し始めました。ヴェーダやヴェーダーンタ、ウパニシャドなどの詩句を学び、さらにそれを暗記しました。3歳のとき父親が亡くなり、以降は母親に育てられました。ブラーミンのカーストだったシャンカラは、ヒンドゥ教の伝統的な通過儀礼として聖糸を授かりましたが、その時まだ5歳でした。ある学者のもとで様々な聖典を学び、自身が偉大な学者となりました。インドには「六派哲学」と呼ばれる6つの伝統哲学がありますが、シャンカラはこの全てを習得したのです。

シャンカラの母親は、プールナー川で沐浴して川から飲み水を持って帰るのが大好きでした。ある日、母親は川に水を汲みに行くとめまいがして気を失ってしまいました。シャンカラは水のためにわざわざ離れた川まで行かねばならない母親が大変心配になり、シヴァ神に祈りを捧げて母親がこのように苦労しないですむようにと頼みました。シヴァの恩寵で、後にプールナー川は流れを変えてシャンカラの家の近くを流れるようになり、母親は沐浴や水のために遠くまで行く必要がなくなりました。シャンカラが8歳の時、結婚の申し出が来ました。この時シャンカラは母親に、自分は16歳までしか生きられないこと、生まれながらにして僧侶であることを話し、サンニャーシーとして生涯を送ることを認めて欲しいと頼みました。しかし母親は、息子への愛情のあまりこの願いを認めることはできませんでした。

ある日、シャンカラが母親と一緒にプールナー川で沐浴していると、突然、大きなワニがシャンカラを襲いました。なんとかワニを追い払おうとしたものの、シャンカラは深い水の中に引きずり込まれてしまいます。母親が悲鳴を上げると、シャンカラは大声で、「お母さん、サンニャーシーになるのを許してくだされば、ワニは僕を逃がしてくれます」と叫びました。母親にとって息子の命はかけがえのないものですから、シャンカラの母親はすぐに「分かりました、許しましょう」と言いました。すると、なんとワニはすぐにシャンカラを放して水中深くへと消えてしまったのです。こうして母親の許可を得たシャンカラは、8歳で家を出ることにしました。ただし母親は、自分の死に際には必ず自分の元に来ると約束してほしい、と条件をつけました。正統な出家の決まりでは、いったん放棄の誓いを立てたら家庭や親との連絡は絶つことになっています。しかしシャンカラは母親の条件に従うと約束して家を出ました。

**グル・ゴーヴィンダ**

ヴェーダーンタ聖典の偉大な教師にゴーヴィンダ・パダという人がいました。ゴーヴィンダは非二元論を強く信奉する博識な学者でした。シャンカラは彼の元に行き、自分にブラフマンの知識を授けてサンニャーシーにしてほしいと嘆願しました。ゴーヴィンダは少年シャンカラを見ると「何者か」と尋ねました。実はゴーヴィンダはある理論によって、シャンカラが自分の弟子になることが分かっていました。いずれにしてもシャンカラは大変意味の深い答えを返しました。「偉大なる師よ、私は土でも水でもなく、エーテルでも火でも風でもありません。私は感覚ではなく肉体でもありません。私はこれら全てを超えた存在です。私はシヴァです。私はパラマートマンです」ゴーヴィンダは8歳の子供がこのように答えたことに大変驚き、ヴェーダーンタを教えてサンニャーシーにしてやると約束しました。シャンカラはサンニャーシーになるとすぐに熱心に修行を始めました。

暑い日も寒い日も雨の降る日も関係なく、シャンカラは何日もの間、瞑想してサマーディに浸り続けました。このような深い霊的修行の実践に大変喜んだゴーヴィンダは、こう言いました。「息子よ、お前の目的は達せられた。悟りを得て真理を我がものとしたのだ。さあ、遍歴僧としての生活を始めなさい。まずヴァーラーナシーに行くのだ」ここで少し説明しておくと、一般に、ヒンドゥ教の中心地といえばヴァーラーナシーとされています。主要な巡礼地であるこの場所には、僧侶、霊性の説教者、聖典の学者、信者などが数多く住んでいます。こうした人々の信奉する宗教の学派は様々です。ゴーヴィンダはシャンカラに対し、この地に行って人々に非二元論を説き『ブラフマ・スートラ』の注釈を書くように言ったのです。

**説教と注釈書の執筆**

『ブラフマ・スートラ』は、聖賢ヴィヤーサがヴェーダーンタの非二元論を提唱するという内容で、形式としてはパタンジャリの『ヨーガ・スートラ』のように箴言（しんげん。格言など、教訓的内容を持つ短い句）で構成されています。『ヨーガ・スートラ』はヨーガ哲学に関する箴言集で、ナーラダの『バクティ・スートラ』はバクティ（神への強い愛・信仰）の哲学についての箴言集ですが、同じように、『ブラフマ・スートラ』はヴェーダーンタ哲学に関する箴言集です。これらの箴言集は大変的確ですが、同時に読み解くのが難しく、注釈がなければ普通の人には全く理解できないでしょう。スートラが作られると、後から｢バーシャ」（Bhasya）と呼ばれる注釈書が書かれます。例えば、パタンジャリの『ヨーガ・スートラ』の注釈書をヴィヤーサが書いていますね。同じように、『ブラフマ・スートラ』の注釈書『ブラフマスートラバーシャ』（Brahmasutrabhasya）をシャンカラーチャーリヤが書きました。

グルに言われた通り、シャンカラはヴァーラーナシーに行き非二元論を説き始めました。シャンカラの理論と知識の光に強く印象付けられ、他の学派を信奉する学者の多くがシャンカラの弟子になりました。その後シャンカラはインド各地を訪ね、ついにヒマラヤへ行きました。ヒマラヤには、ケーダールナート（Kedarnath）やバドリーナート（Badrinath）などの有名な巡礼地が数多くあります。『マハーバーラタ』を編纂したヴィヤーサもバドリーナートに住んでいたことがあります。バドリカーシャラム（Badrikashram）の静けさと穏やかさに満ちた空気の中で、シャンカラは注釈書を書き始めました。自分が長くは生きられないことを知っていたので、自らの持つ全てのエネルギーと時間をこの仕事に捧げました。

シャンカラの書いたものには3種類あります。1種類目は聖典の注釈書です。『ブラフマスートラバーシャ』の他に『バガヴァット・ギーター』の注釈書も書き、さらに『カタ・ウパニシャド』を始めとする、『ウパニシャド』の中の最も重要な12の聖典についても注釈書を書きました。これらの注釈書は驚くほど深い哲学的思惟と掘り下げた議論を展開していると同時に大変合理的で、この著者がわずか14、5歳であることにただただ驚嘆するばかりです。

シャンカラの書いたものの2種類目は、ヴェーダーンタ哲学の解説書のようなもので、深遠なヴェーダーンタの理解に役立つものです。最も有名なものとして『ヴィヴェーカチュダーマニ』（Vivekachudamani、「最高の宝石たる識別（The Crest Jewel of Discrimination）」の意）という非二元論の解説書があります。その他、『ウパデーシャサハスリー』（Upadesasahasri、「千の教え」の意）や『サルヴァ・ヴェーダーンタ・シッダーンタ』（Sarva Vedanta Siddhanta、「全てのヴェーダーンタの結論・真髄」の意）などもあります。

**賛歌**

シャンカラの書いたものの3種類目は、賛歌です。シャンカラの賛歌は、深みがあり美しいだけでなく、なめらかで優しい流れがあるので、自然と繰り返し唱えたくなり、また唱えることで気持ちが高揚します。シャンカラの賛歌の多くはとても有名で、今でもたくさんの人が好んで歌います。「ニルヴァーナ・シャタカム」（Nirvana Shatakam）という歌があるので紹介しましょう。

mano buddhi ahankara chittani naaham

na cha shrotravjihve na cha ghraana netre

na cha vyoma bhumir na tejo na vaayuhu

chidananda rupah shivo"ham shivo”ham

（私は心ではなく、知性でもなく、エゴ（自我）でもない

聞く、味わう、嗅ぐ、見るの感覚でもない

空でもなく、土でもなく、火でもなく、空気でもない

私は常に純粋な至福の意識だ、私はシヴァだ、私はシヴァだ

常に純粋な至福の意識だ）

また、「カウピーナ・パンチャカム」（Kaupeena Panchakam）という、出家者に捧げた賛歌もあります。これは「出家僧はとても幸運だ」というくだりで始まります。

Vedantha Vakhyeshu Sada ramantho,

Bhikshannamathrena trishtimantha,

Vishokamantha karane charantha,

Kaupeenavantha Khalu bhaghyavantha

（僧侶は、ヴェーダーンタを学んで常に幸福だ

乞食（こつじき）で施された食に満足し

心には一片の悲しみもなく、喜びのうちに行脚し

腰布を身にまとい、とても幸運だ）

また、「アンナプールナー・ストトラム」（Annapurna Stotram）という賛歌もあります。シャンカラの作ったこのアンナプールナーの賛歌は、ヴァーラーナシーにあるアンナプールナー寺院で毎朝流れます。出だしの部分はこうです。

Nityanandakari varabhayakari saundaryaratnakari

Nirdhutakhilaghorapavanakari pratyaxamaheshvari

Praleyachalavanshapavanakari kashipuradhishvari

Bhiksham dehi kripavalambanakari matanapurneshvari

（おお、アンナプールナー母神よ！慈悲を守護するお方

永遠の幸福を授けるお方、才能と守護を与えるお方

美の大海なるお方、罪を破壊し浄めるお方

偉大なる女神よ、我らに施したまえ）

ある時期、シャンカラはシャクティ（ブラフマンの宇宙の根源力）を信じようとしませんでした。ブラフマンのみを信じ、シャクティを認めようとしなかったのです。シャンカラは、ブラフマンが唯一の実在で他の現象は全て幻に過ぎないと言っていました。その後シャンカラは、ある時ヴァーラーナシーでとても具合が悪くなりガンガーのほとりのガート（沐浴場）に座っていました。とても喉が渇いたので、近くにいた女性に飲み水をもらえないかとお願いしました。女性は「自分で川から水を汲めばいいでしょう」と答えました。これに対しシャンカラが「具合が悪くて、動く力がないんです」と言うと女性は、「なぜでしょう。シャクティを信じていないのですか」と尋ねました。実はこの女性は母神で、シャンカラに「シャクティとは何か」を教えようとしていたのです。シャクティはブラフマンと異なるものではなく、ブラフマンの一面なのだ、ということを教えていたのです。シャンカラの理解には何かが欠けているように見えたので、母神は親切にもシャンカラに教訓を与えたのです。シャンカラは母神の言ったことを正しいと考え、これ以降も非二元論者ではあったけれど、神々を礼拝し信仰する余地を自身の哲学に取り入れました。この例となる賛歌が、「バジャ・ゴーヴィンダム」です。

**命が2倍になる**

自分は16年の命であると知っていたシャンカラは、書きたいものを全て、急いで書き上げました。伝えられたところによると、『ブラフマ・スートラ』の注釈書に何と書かれているのか知りたくなった聖賢ヴィヤーサが、シャンカラの前に現れたそうです。注釈の内容を聞いたヴィヤーサは大変喜び、ヴェーダーンタを教えるという使命を全うできるようシャンカラにさらに16年の命を与えました。

シャンカラは再びインド各地を旅して、仏教を含め様々な学派の学者に数多く会い、哲学的な議論を行いました。「論破された方がした方の弟子になる」というのを条件に、シャンカラは議論に挑みました。

ここで、シャンカラの生きていた時代の社会的・宗教的背景を説明しておきましょう。当時、ヒンドゥ教の真の思想はほとんど失われており、インド全土に広まっていた仏教が社会や宗教的な考え方に大きな影響を与えていました。しかしこの仏教も純粋な仏教ではなく、大変難解なものになっていたので、哲学者が仏教で言わんとしていること、例えばニルヴァーナ（涅槃、ねはん）などの考えは人々にはほとんど理解できませんでした。また、仏教を装って、タントラのひどく不道徳な慣習が行われるようになっていました。ジャイナ教も大変分かりにくいものになり、ジャイナ教における「実在」とは何かを理解する人はほとんどいませんでした。さらに、ヒンドゥ教の名の下で、儀式が偏重され非道徳的で分かりにくい慣習が形成されていました。こうした中、シャンカラの使命はヴェーダとウパニシャドに基づく真のヒンドゥ教を復活させることでした。この使命を果たすには、他の学派や仏教、ジャイナ教など当時広まっていた哲学の学者を論破する必要があったのです。

ヴィヤーサに言われたとおり、シャンカラは使命を果たすべく一生懸命に働きました。あちこちを訪ねて他の学派の学者を招き、非二元論を深めていきました。また、シャンカラには出家の弟子もおり、弟子たちとともに様々な場所に行ってヴェーダーンタを説いて回りました。さらに各地の王や諸侯、富裕な有力者に対し、病院、食事の配給所など慈善活動のための場所や巡礼者のための宿泊所などを作るよう頼みました。

**その他の活動**

このような活動をしているとき、シャンカラは突然、自分の母親に死期が迫っていることを感じました。シャンカラは急いで母の元に行き、母の世話をし母のイシュタ（信者が自分で選んだ理想神）であるゴーヴィンダのビジョンを見せてやりました。母が亡くなった時、魂を見送り火葬する儀式を伝統的なやり方で行うつもりだったので、現地の村人たちに手伝いを頼みました。しかし村人たちは、僧侶である者は社会の一員ではないのだからこうした儀式に参列すべきでないという理由から協力してくれませんでした。結局、シャンカラは一人で全てを取り計らいました。

ヒンドゥ教と僧院制度の礎を強化するために、シャンカラはさらに働きました。インド国内の東西南北の地にマト（僧院）を建て、出家僧が生活し礼拝を行うことができるようにしたのです。北はバドリーナートに、南はシュリンゲーリ（Sringeri）に、東はプリー（Puri）に、西はドワーラカー（Dwaraka）に、それぞれ1箇所ずつマトを建設しました。南インドのマイソール（Mysore）にトゥンガバドラー（Tungabhadra）という川がありますが、シャンカラはこの川の土手にシュリンゲーリ・マト（Sringeri Matha）を建てました。東のプリーではベンガル湾沿岸にゴヴァルダナ・マト（Govardhana Matha）を、西は現在のグジャラート（Gujarat）に当たる地域にサーラダー・マト（Sarada Matha）を、北はウッタラーカンド北部のバドリーナートに、アラカナンダ（またはアラクナンダ、Alakananda）川の岸辺にジョーティルマト（Jyotirmath）を建てました。これらのマトはヴェーダーンタ哲学の研究と霊的実践のために、そして東西南北のいずこであろうとインド全土のヒンドゥ教徒を導くために作られ、今日も同じ目的のために存在し続けています。

シャンカラはまた、「ダシャナーミ・セクト」（Dashanami Sect、「10の宗派」の意）と呼ばれる、ヒンドゥ教の僧侶の10の宗派を創設しました。宗派の名前は、ティールタ（Tirtha）、バナ（Bana）、アランニャ（Aranya）、ギリ（Giri）、プリー（Puri）、バーラティ（Bharati）、パルヴァタ（Parvata）、サーガラ（Sagara）、サラスワティ（Saraswati）、アーシュラム（Aashram）です。例えば、ラーマクリシュナ・ミッションの僧侶はプリー派になります。というのも、シュリー・ラーマクリシュナのグルがプリー派のトーター・プリーだったからです。

最後にシャンカラはケーダールナートに行き、ある説によると、洞窟に入って二度と出てこなかったそうです。いずれにしても、予言の通りシャンカラは32歳で亡くなり、ヒンドゥ教を体系化し数々の貴重な書物を後世に残しました。

**シャンカラの哲学**

シャンカラの哲学の最も重要な点は何でしょうか。先ほどヴェーダーンタには、非二元論（Advaita）、限定非二元論（または限定一元論、Vishishtadvaita）、二元論（Dvaita）の三つの学派があることをお話しました。シャンカラはヴェーダーンタの非二元論の提唱者ですが、この非二元論ではジーヴァとブラフマンが一つだとされています。しかしジーヴァはマーヤーの影響を受けて、自分がブラフマンと同一であることを忘れ、誤って自分を心や体と同一視しています。そして、このことから全ての苦しみや無知が生まれるのです。ジーヴァは、感覚器官で知覚するものが全て幻だということに気付かず、本物だと信じています。エゴによる無知から、ブラフマンの上にこの世界を重ねて見ていて、この世界が唯一の実在であると思い込んでいます。暗い所にいると、ロープが蛇に見えてしまうことがありますね。これはロープの上に蛇のイメージを重ねて見ているからですが、ロープが実在、蛇は幻です。これと同じように、人はこの世界をブラフマンだと思い込んでいて、この世界こそが実在だと勘違いしているのです。本当はこの世界は幻に過ぎません。

**シャンカラの助言**

シャンカラは、知覚するものを実在だと考えてはいけない、と助言しています。全ては幻であり、ブラフマンだけが実在です。幻を実在だと信じていると苦しみは終わりません。永遠の平安、喜び、知識、自由の源であるブラフマンが実在であると気付けば、全ての苦しみは終わり、絶対の平安、喜び、知識、自由を得られるのです。この真理を得るには、ハートを浄らかにしなければなりません。また、体意識も捨てる必要があります。粗大な体、精妙な体に関わらず体に強く執着している限り、純粋意識であるアートマンを悟ることはできません。アートマンの意識を悟るには体意識を捨てねばならないのです。これは、心、体、感覚を制御することで可能になります。また、真理と実在に考えを集中することも必要です。ヴェーダーンタについて本を読む・学ぶ、実在について話を聞く・瞑想するなどし、実在と非実在、永遠なものと一時的なもの、相対的なものと絶対的なものを識別することで、真理と実在に集中できます。繰り返すと、真理を悟るには「体意識を捨てる」「常に実在について学び瞑想する」「実在と非実在を識別する」という三つの実践が必要です。

シャンカラは賛歌「バジャ・ゴーヴィンダム」の中で、「識別」し「実在に集中」するという二つの霊的実践が大切だとしています。この識別には重要な面がたくさんありますので、次回の講話で一つずつ詳しく説明していきたいと思います。